



今回表紙に登場していただいた七村千里男さんに、自身の視覚障がいのこと、日々の生活のこと、伝えたいことをお伺いしました。

## 全盲という視覚障がい

市内に住む七村千里男さんは45歳の時に視力の低下を感じ始め、病院を受診すると「網膜色素変性症」と診断されました。この病気は、視力がだんだんと下がっていき、ハチの巣状に視野が欠損していくもので、医師からいずれは失明すると伝えられたそうです。それまでは建設会社で設計の仕事をしており、車の運転もしていたのですが、症状が進むにつれ、視界にモヤがかかったような状態になり、50代後半で全盲になりました。

現在は、内装や外壁の塗装をする会社を興して仕事をしながら、市や県の身体障害者福祉協会などで精力的に活動されています。

## 毎日工夫をしながら生活

毎日の生活で困っていることはない話す七村さん。「自分で食べるので少々まずくても大丈夫」と食事も自身で作るそうです。料理していることを人に話すと「包丁で手を切らないの?」と聞かれることが多いそうですが、「包丁の下に手を置くから切れる。その辺は感覚でわかるので手を切ることはない。」と自信たっぷりに教えてくれました。裁縫はセルフ針(簡単に糸を通せる針)を使うことで自分でできるし、お金の支払いも、硬貨を種類ごとに財布に入れてるので

困らないと、さまざまな工夫をしながら楽しんで生活を送っている様子が伝わってきます。会議でも議事録を作ることが多いそうで、どのように作成しているのかを伺ったところ、「こうやるんですよ」と携帯電話の音声読み上げ機能を使いながら素早く作成するところを見せてくれました。他にも「これからはみんなスマホを使う時代」と無線通信で接続できる身体障がい者用のキーボードを使って凹凸のないスマートフォンを使用していることや、写真に撮った画像を読み上げてくれるアプリを駆使して服を選んでいること、映像を説明してくれるアプリを使って映画を楽しんでいることを教えてくれました。「昔と違って今はいろんな技術が生まれて便利になった。そのおかげで幸せに暮らしています。」

## 芦屋市への思い

七村さんに、芦屋市が今後どんな街になればいいか聞いてみたところ、「音声信号機と誘導タイルがもっと設置されて視覚障がい者が外出しやすい街になってほしい。あと、白杖を持っている人を見かけたら、肩をポンと叩いて『お手伝いしましょうか?』と声掛けをしてくれる人が増えると嬉しい」とのこと。今はまだ、白杖を持っている人が目の不自由な



七村千里男さん  
50代後半で視力を失ったが、明るく前向きな人柄は、いつもまわりを楽しみやすい気持ちに包みこんでくれます。

人と知らない人が多く、白杖をついて歩いても足の不自由な人と勘違いされることが多いそうです。「白杖を知らない人にも視覚障がいがあるとわかってもらえるようにバッジをつけていますが、まだまだ浸透していません。」こんな現状を変えようと七村さんは、幼稚園や小中学校で福祉授業を行っています。そこでは、声掛けをしてほしいということ、道のデコボコや段差など危ないと思う場所があれば、先生や親、市役所に伝えてほしいということ子どもたちに伝えています。授業を受けた後には子どもたちがたくさん声をかけてくれるようになったそうです。「子どもたちが声をかけて助けてくれた時は、学校に感謝を伝えるようにしています。そうすればお互いに嬉しいでしょう。」と笑顔で話してくれました。

## つながることの大切さ

さまざまな福祉団体での活動の他にも、魚釣り・ボウリング・サウンドテーブルテニスと多趣味な七村さんは忙しい毎日を送っています。「いろいろな形でいろいろな人と繋がることで、たくさんのお話を教えてもらっています。おかげで楽しい毎日を送っています。」と謙虚に語る七村さんの姿から、「人とのつながり」「社会とのつながり」が人生の豊かさにつながり、共生社会の実現につながるのだと実感しました。



▲高校で福祉学習の講師をする七村さん



▲サウンドテーブルテニスを楽しんでいます